

# 12・21ルネ研 「ポピュリズムとは何か」

新開純也 2019年12月21日

## (1) 水島治郎『ポピュリズムとは何か』（中公新書）の紹介

水島は大嶽秀夫らの「政党や議会を迂回して、有権者に直接的に訴えかける政治手法」といった見解を取らずに「政治変革を目指す勢力が、既成の権力構造やエリート層（及び社会の支配的価値観）を批判し、「人民」に訴えてその主張の実現を目指す運動」と定義する。

「特権層（エリート）と人民（民衆、市民）の二項対立—前者が悪後者が善

左右でなく上下が問題、カリスマ的リーダーの存在、政策は対エリートだから時の主流と反対で定見はない（当初新自由主義的→反グロー福祉といったように）

民主主義との関連—ポピュリズムは非民主主義者か？—国民投票の多用に見られるようにエリートの牛耳る間接民主主義より直接「人民」に信を問う直接民主主義

近代民主主義の二つの解釈—立憲的（実務型）法の支配、個人的自由の尊重、議会等による権力の抑制、他方人民の意思の実現（ルソーの一般意思）を重視する「民主主義型」（救済型）ポピュリズムは後者型ポピュリズムは民主主義を発展させるか破壊するか—周辺化された部分の利害を掬い取るというみでは民主主義を発展させる、他方立憲主義の軽視、敵・味方の峻別による対立の激化歴史と各国のポピュの紹介評価等 グローバル化とポピュリズム 以上水島の荒い紹介

## (2) ポピュリズムは「大衆社会」の成立を前提とする—『大衆の叛逆』オルテガ（ちくま学芸文庫）—大衆（人）の登場を論じた古典。—エリート主義、ヨーロッパ中心主義、もっと言えば植民地主義ではあるがそれを含めて歴史的書。

「今日のヨーロッパ社会において最も重要な一つの事実がある。大衆が完全に社会的権力の座に登ったという事実」

「デモクラシーはかつては法および合法的共存と同義語」「今や大衆が法を持つことなく直接的に行動し、物理的な圧力を手段とした自己の希望と好みを社会に強制する」

「大衆は、喫茶店での話題から得た結論を実社会に強制し。それに法の力を与える権利を持つと信じる」

この大衆は19世紀の自由主義的デモクラシーと技術（科学の発展）から生まれた。

（封建制までの社会では身分制によって政治も当然支配者階級に独占されていた。資本主義になっても19世紀までは制限選挙もあり上層の（ブルジョア、地主）、職業的政治家によって為政されていた）

（20世紀に入って重化学工業化、都市への人口の集中と都市中産階級の登場、労働組合や各種同業組合＝利害圧力団体、消費社会の登場、大衆政党の登場ないし大衆政党への転換）

（この大衆社会以前のポピュリズムないし、それに最も近いのはルイ・ボナパルト—マルクスが「ブリュメール18日」で描いたボナパルチズム）

括弧内は新開の見解 なお、このレジュメを書いた後『試される民主主義—20世紀ヨーロッパの政治思想上下』（岩波、ヤン＝ヴェイルナー・ミュラー）を読んだ。好著である。

### (3) 危機ないしは閉塞の産物としてのポピュリズム

上記したようにポピュリズムが大衆社会を前提とするとしても常に存在ないし注目される勢力を持つわけではない。資本主義の安定期には影を潜めその危機や行き詰まりの閉塞状況に登場する。エスタブリッシュを下から攻撃するにはその原因—格差や上層の腐敗があり下層がこれまで通りではありたくないと思ひ、また政治への参加や自己決定権から遠ざけられていると感じる—があるからである。

新自由主義、特に2008年リーマンショック以降そのような時代閉塞の時期に入った。それを前後して各国でのポピュリズム勢力の活動が活発になり勢力を拡大してきた。

### (4) 左派（左翼）ポピュリズムの範疇

所で、水島の定義を文字通り受ければ、従来の範疇で言えば左翼こそがポピュリズムだということになる。社民でさえ少なくとも言辞上はこの範疇に入る。「既成の権力構造やエリート層」をどう考えるかによる。

「既成の・・・」がブルジョアジーを意味するなら左翼は全てポピュリズムである。だが、水島等の想定では社民は“既成”でありかつ中産階級や労働者上層に依拠する“エリート”であろう。

また前衛—大衆（プロレタリアート）の構造での共産主義（新左翼の大部分も含む）もある種の“エリート”主義、啓蒙主義でありポピュリズムには入らないのであろう。また現実には社会主義の崩壊とともに欧州ではそれまでのユーロコミュニズムも消滅した。

かくて、新自由主義全盛の中から生まれた反グローバル→2011年以降の社会運動（木下ちがや等が言う「新しいアナーキズム」運動（「ポピュリズムと民意の政治学」大月書店）あるいはシャルタン・ムフたちが言う「ラディカル・デモクラシー」をさして左派ポピュリズムということにする。

この運動は前衛—大衆型の運動がマルクス主義等の原理を持ち従って啓蒙主義的であるのに対し、むしろ現実の矛盾から出発する分下からの“情動的”、扇動的である。

但し何らかの指導部を持たない運動はないのだから前衛—大衆型（特にその変形）の運動との差は相対的な物かもしれない。このように考えると左派ポピュリズムと明確に言えるのはポデモスぐらいであって例えばコービンのイギリス労働党をそう呼ぶのは疑問であろう。但し組織より運動の要素を重視すればそう呼びたければ呼んだらいい。

### (5) 右翼ポピュリズムとどう戦うか

ジジェック「上流階級による搾取に反対する人民の動員と闘争という旧き左翼的な急進的スタンスをまさに形態において引き継いでいるのは、保守的でポピュリスト的な草の根運動なのだ」（『2011危うく夢見た一年』長原訳航思社）

トランプのラストベルト地帯での（旧民主党の牙城）勝利、ジョンソンのロンドン周囲の労働党牙城での勝利

1970年代までは右＝上層、左＝下層と線引き簡単—二象限

90年代特にリーマンショック以降、右—上と下（＝ポピュリズム）左—中（社民）下（左翼ないし左派ポピュリズムと）の四象限に分化

このような構図になったのは新自由主義での格差の増大（従来の厚い中間層の分解）、とりわけリー

マンショック以降、である。

だが格差の拡大だけではポピュリズムは成立しない。その改善への道が閉ざされ自己決定権＝参加＝民主主義が奪われていると下層(一部中間層)が感じる時成立。

道を閉ざしている為政者＝エリートとはEU官僚や既成の政党であり時にはウォール街

「下層」とは(A)移民労働者や、非正規雇用労働者等の“アンダークラス”であり(B)移民労働者によって職を奪われると感じたり外国の競争に敗北したあるいはそれを恐れる産業下の中下層労働者(EMラストベルトのプアホワイト)である。

社民＝労働組合は公務員や大企業正規雇用労働者が中心の上層＝エリートの組織

水島氏はポピュリズムへの対応を「孤立化」、「非正統化」、「適応」＝「抱き込み」、「社会化」の四つのパターンにわけ各国での実例とその得失を上げている。しかし、それは水島のスタンディングポイントが旧来の二大政党制下の「民主主義」におかれ(おそらくは中道左派の立場)そこから見た対応なのである。

問題なのはジジックが含意しているように右翼ポピュリズムに動員される下層(一部中間層)を左派が奪還獲得できるかである。

そこで登場するのが左派ポピュリズムである。中道左派(社民や日本の立民)はこの部分(下層)を組織できない。しかし対右翼統一戦線の対象である。

・ラディカルデモクラシーや新アナーキズムの評価についてはM氏による別報告

## (6) れいわ＝山本太郎の展望一別紙